土木森林環境委員会　県内調査活動状況

１　日　　時　　平成２２年１月２５日（月）

２　出席委員（９名）

委 員 長　　渡辺　英機

副委員長　　石井　脩徳

委　　員　　中村　正則　　森屋　　宏　　木村富貴子　　内田　　健　　中込　博文

河西　敏郎　　小越　智子

欠　　席　　な　し

地元議員　　土屋　　直　　岡　　伸　　樋口　雄一　　仁ノ平尚子（甲府市）

深沢登志夫　　望月　　勝　（南巨摩郡）

３　調査先及び調査内容

（１）【都市計画道路 愛宕町下条線道路工事】

県立大学池田キャンパスの会議室において、当事業の説明を受けた後、質疑を行った。

その後、現地視察を行った。

○調査内容（主な質疑）

問）当事業は、甲府市においては長年の大きな課題であり、甲斐市と甲府市の施工では２４年末の供用開始は不可能で、加えて、県立中央病院の改築ということもあり、県の力を借りないといつになってもできないということがあったので、県の取り組みに感謝している。甲府市が施工しなければならない甲府駅北口の区画整理事業だが、県の取り組みはどうなっているのか。せっかくなのでいつになるのか聞きたい。

答）朝日町の通りなど、ＪＲに関連する工事に一番時間がかかり、区画整理事業の完成は１３年後の平成３５年になる予定。愛宕町下条線の受けとなる英和高校前の通りに都市計画道路の古府中環状浅原橋線が入っていて、そこの改良がなかなかできない。県としては、市町村の行う区画整理事業に補助を出して支援をしているが、平成３５年という区画整理事業の全体計画の中で、この区域の道路ができあがっていくことになる。

問）切り離せない区画整理事業に県の補助金が出されるし、愛宕町下条線の起点にもなるわけだから、少なくとも愛宕町下条線を優先する中で、県から補助金を出すという点で指導も可能ではないかと思うので、取り組みをお願いしたい。

この事業は甲斐市中下条で終わりだが、響ヶ丘から双葉町へ向かうと、４車線から２車

線になるため、響ヶ丘周辺が渋滞する。せっかくなので、愛宕町下条線を韮崎までということを考えたらどうか。こういう事業は事業認可を受けるまで何１０年もかかるわけだから、今のうちに議論しておかないと間に合わないと思うが、県土整備部ではどんな取り組みをしているのか。

答）愛宕町下条線の区画整理事業は３５年までとなっているが、甲府駅北口整備の関係で、舞鶴陸橋からの交差点までの区間は整備が早いと思う。

それから、甲斐市中下条から西側については、２車線だが、市道開発１号線ということで、１９年から２５年の予定で市が事業をしている。現状は片側に１．５メートルの歩道があり、全幅が８メートルの道路になっている。それを、両側に２．５メートルの歩道を設けた全幅が１３メートルの道路に改良を行っている。

そういった事業もあわせながら、市街地の道路網の整備をできるだけ早く進めていきたいと思う。

問）１日平均２５，０００台ということだが、どのような車が流れてくると想定しているのか、その北側にある山の手通りの渋滞はどの程度緩和される予定なのか。山の手通りの２車線になっているところはどうなるのか。

答）山の手通りは４車線で使っているが、本来であれば２車線の道路幅であり、それが交通量をかかえているので、工夫しながら使っている。緑ヶ丘のところは、右折レーンをとるために２車線を１車線にするなどしている。

今までの実験で言うと、甲府工業前の道路が１２年３月に供用開始したが、それと並行する山の手通りでは、塩部の曲がっているあたりがちょうど対応するところになる。そこでは１８％くらいの交通量が減っている。このことから、愛宕町下条線が全線供用した場合に、山の手通りは約２０％の交通量の減が見込まれる。しかし、現在山の手通りは２万台以上の車が流れている。仮に２万台として、２０％減ったとしても、１６，０００台が現道に残っていることになり、車道の数とすると、４車線が必要になる。山の手通りの交通量は減るが、２車線のものを４車線で使うという状況は変わらない。交通量は減るので、多少の渋滞緩和には貢献できると思う。

（２）【森林総合研究所】

森林総合研究所会議室において、当事業の説明を受けた後、質疑を行った。

その後、現地視察を行った。

○調査内容（主な質疑）

問）森林総合研究所では、主に林業に関わる方々の研修や技術指導を含めて林業に従事する方への研修について、何人くらいの方に、どのような技術指導等の研修をしているのか。

答）主に林業従事者や森林組合等に対して、専門研修ということで、科目としては２０項目で２８７名が研修をしている。特に、新しい林業機械の普及等に努めており、作業路の作設や林業機械使用技術の習得など、より低コストの林業に向けた事業体育成を中心として研修をしている。

問）それらは、現場でどのように生かされているのか、技術的な指導が多いと思うが、新しく県産材を使うことや、販路拡大とかそちらのほうは何かあるのか。

答）販路というよりは、　森林組合等の事業体の経営が悪いということで、どのようにしたら経営が右肩上がりになるか、普及職員が事業体の経営状況を分析する中で、指導等行っている。また、県森連についてはサテライト市場を開いたりして、木材の販路拡大を図っている。少しは売れているようだと聞いているが、最近の経済情勢もあり、木材の市況については、なかなか思うように材を使用してもらうことは難しいのが実態である。

以　　上